

この出会いが必然であつたというのなら、私は幸せだったのだろうか？

先のグリップス戦では、私は幸か不幸か生き延びてしまったので、書いた物が表に出る事は無かつた。だが、今度の出撃はあの時よりも厳しい結果になるかもしれない。

そして私が死んだ後にこの文章が公の目に曝された時、私が今まで築き上げてきた事の全てが崩壊するだろう。だが、私はそれでも構わないと思つてゐる。なぜなら、私の本当姿が世間に暴露されてしまふのを望んでいるもう一人の自分が心の中にいるのだから……。

*

*

グリップス戦で、シャアを倒し損なつた……とは言つても、あの場面で私が彼にトドメを刺せたのかと言えば、多分出来なかつたと思う。また何故彼があれ程意固地なまでに私の求めを拒否したのか……それは私達の関係を知らない者達にとっては理解しがたい光景に映つたかも知れない。

自分の意のままに動かなくなつた私を嫌いだった？ 事實はそんな単純な所にあるのではない。むしろ私とシャアの体の相性は最高に良いし、今でも自室でプライベートな時には主従関係をはつきりさせている位だ。それなのに彼はその昔付き合つていた頃、私に対して数々のプライベートな部分見せたのだが、それを私は今でも知つてゐる事に対してとても嫌悪感を抱いてゐた。

そして私がいつ交渉の切り札に使うかといつも恐れてゐたらしい。なぜならシャアは誰にも言えない性癖や弱音を私にだけ見せていたのだから……。

私がグワンバンに帰投して程なくした頃、シヤアの身柄を拘束したという情報が飛び込んできた。彼は、廃棄艦に一般兵の姿で潜んでいた所を掃討部隊に発見されたらしい。私は、一見すると大胆ではあるが実は姑息な彼の行動を想像すると、可笑しくて仕方が無かった。そういう所は昔から何一つ変わってないと察した私は、彼を自室に連れて来るように命令した。

どの位経った頃だろう。私が支度を済ませて快樂に身を任せてくつろいでいた時、部屋に設置されている内線がけたたましく鳴り響いた。どうやら衛兵が部屋の外までシヤアを連行してきたらしい。私はガウンに身を包むと入り口の前の所へ彼を立たせるように命令した。そして手錠を外し、下着以外の一切の服を脱がせて逃亡しにくい姿にするようにとも命じた。

数分後、内線で衛兵から準備が出来たと連絡が入ると、私は衛兵を通常任務に戻るように指示し、期待と不安が入り交じった複雑な気持ちでドアロックを開けた。

ドアが開くとそこには一糸纏わぬ姿のまま佇むシヤアの姿があった。久しぶりに見る彼の裸に、私の体は即反応したのだが、表面上はあくまでも冷静に務めた。

「なんだお前。下着は付けて良いと言った筈なのに・・・相変わらず露出が好きなのか？」
わざと軽蔑の眼差しと態度で言い放った。

「貴様と私の間柄だ。隠す事も無いだろうと思ってな」

そう言うとは彼は両手を挙げてクルツと一週して見せた。

「見ての通り、武器は持ってない」

「そうかな？アヌスの中にナイフでも仕込んであるんじゃないのか？お前は私を殺したい位嫌っているだろう？」

「私が？お前を？」

「ああそうだ。・・・違うのか？お前の過去を知る私がいなくなれば、お前は精神的にも肉体的にも自由になれる訳だからな」

「確かに・・・そう思った事もあったが・・・私はもう誰も失いたくはないのだ。例えハマーン、お前であつてもな」

彼の意外な言葉に、私は一瞬躊躇した。

「どういう事だ。シャア？どういう心変わりなんだい？」

「その前に、座って・・・いいか？」

「ああ・・・そこに座るがいい」

私はシャアを対面のソファに座るように命じた。彼は裸のままに腰を落とすと、頭を抱えて悲痛な表情を浮かべながら淡々と話し始めた。

「先程の戦争で、私は余りにも多くの友人を失ってしまったよ」

「・・・仕方ない事じゃないか。今はそういう時代なのだから」

「それは充分理解しているつもりだ。だがもう私の心はそれに耐えられる状態では無いのだよ」

「ふん。赤い彗星らしくもない事を言う」

「昔の話だ。お前が尊敬し、憧れ、体を許した赤い彗星はもう存在しない。ここにいるのは只の老いた敗残兵だよ」

私はシャアの言葉に少し腹立たしさを覚えながらも、あくまでも冷静に答えた。

「お前がどう思っているかが、お前自体が生きている限りは、それを利用し動こうとするものが必ず現れるよ。お前はそういう星の下に生まれてる事を自覚した方がいい」

「お前が私を利用するとも言えるのか？ハマーン？」

「私が？今のお前を利用するだと？」

「ああ。私がエウーゴの使節として来た時はそう言った筈だが・・・違うのか？」

私は薄笑いを浮かべながら彼の元へ近寄り、人差し指で彼の顎をクイツと挙げながら言い放った。

「お前は本当に世の中の流れを読めない男だな。戦争が終わった今、お前にどれ程の利用価値があるというのだ？今のアクシズは戦力的には圧倒的に優位な立場にあるんだぞ」

軽く平手打ちをすると、彼の表情が屈辱に満ちた状態になった。

「なら、なぜ私をここに呼んだ！」

「ふふっ、我々にとって利用価値が無い男でも、立場が違えばお前を利用しようと思う者が現れるかもしれないからな」

「どういう事だ？」

「お前をここに閉じこめておけば、他の者に利用される事が無いという事だよ」

「貴様は私を監禁・・・いや、奴隷として扱うというのか？」

彼の言葉に、私は薄笑いを浮かべながら言った。

「ほう。お前は私の奴隷になりたいというのか？歓迎するぞ」

「バカな事を！」

「だが、お前はもう生きる屍なんだろう？戦う事しか知らないお前がこれからどうやって生きていくというのだ？それなら衣食住を保証されているここにいるのが一番安全だと思うがな。違うか？シャア・アズナブル？」

「・・・・・・・・」

彼は力無く首を垂れた。私はこんなシャアを見たくは無かったし、誰にも見せたくは無かった。キャスバルとしてならともかく、シャアとして存在する限りは、一年戦争の時のように他人には弱みを見せない憧れの存在でなければならぬと私は常々思っていた。私はそんな彼の心と呼び戻す為にこの部屋に呼んだのだ。不完全燃焼の彼にもう一度羽ばたいて貰いたいが為に・・・。

どの位経った頃だろうか。沈黙が場を支配していた中で、私は彼の前に歩み寄った。

「大事な話をしたいのだが・・・」

「・・・」

「お前はそのまま埋もれてしまっても良いというのか？シャア？」

「・・・」

「アステロイドベルトにいた頃、何も知らない私を玩具のように弄び、利用して捨てた・・・そんなお前はどこへいったのだ!？」

「ハマーン・・・」

力無く私を見つめる彼に、私は思わず平手打ちをし、無意識に大声を張り上げていた。

「戯れ言もいい加減にしろ! 私は・・・私を捨てて逃げたお前が憎い! でも、それ以上にお前を愛している自分が心の中にいて、それを何度振り払っても消す事が出来ない・・・そんな自分がホントに嫌になるよ!」

「・・・済まない」

「今更謝った所で何になる! いいか! お前には死ぬまで自分の宿命と戦い続ける義務があるのだ! この部屋で私の奴隷として生き続ける以上に辛い義務がな!」

そう言うのと、私はシャアの唇を強引に奪った。彼は一瞬驚いたが、そのまま優しく舌を絡めてきた。

すると、彼の傷付き、疲れた心が私の体内に伝わってきた。私が愛し信頼したシャアがこれ程までに疲れ切つてるとは思ってたなかった。彼は人に利用されるよりも、人を利用して裏切り、恨まれながらも支持されのが似合っているのだ。そういうそういう意味では私を捨てていった事は、客観的にみれば正しいとさえ最近はあるようになった。以前の私ならともかく、今の私はそれがよく判る。

「私に一体何をしろと言うのだ。ハマーン?」

深く絡め合った舌を離し、彼が私を見つめながら言った。

「何をして欲しいと思う? シャア・アズナブル?」

「私にザビ家を再興させる為に動けというのか？お前の手足となって・・・」

「ふふっ。それはお前が死を覚悟して抵抗した時に、もう諦めたよ」

「なら、私との・・・こんな関係を世間に公表するとでもいうのかな？ハマーン」

不敵な笑みを浮かべてはいるが、手を口に当てているので明らかに動揺しているのがよく判る。彼は困った事があるといつも口を手当てるのは昔からのものだ。

「私との関係・・・公表される事が嫌なのか？」

「好きな事では無いな」

「でも、指導者たる者はそんなスキャンダルは当然の様なものではないのか？私の姉もドズル様に・・・」

そこまで言った時、私の心の中で、ドロツとした淫らな血液が体中を駆けめぐる様な感覚を覚えた。私はその時内心ドキドキしながらシヤアを見つめた。すると、サツと目線を逸らしながら彼は言った。

「人は人だ。私ではないよ」

「安心しろ。私はそんな事でお前を苦しめたりはしないよ」

「それはどうか・・・」

「絶対公言しない・・・と私がこれ程言っても・・・信用しないのか？」

「あいにく、私は疑り深い性格なのだな」

「ふふふ。お前は相変わらずだな。まあ、その性格は心得ている」

彼が私の言葉にこう応える事は予想済みだった。全ては次の言葉を言う為の伏線だったから・・・。

「では、取引をしよう。シヤア。私の方も組織が崩壊する位の情報を提供しよう。もし私がお前の性癖を暴露した時は、そちらも遠慮無くその情報を公開するがいい。もつとも・・・それでも私を信用して貰えないと言うのならば、もうどうしようもないのだが・・・」

私の言葉に、シヤアは少し間を置いてから答えた。

「その言葉は・・・信用出来るのか？」

「それはお前の目で確かめて見るがいい。そしてそれで判断して貰おう。どうだ？シヤア？」

「判った。どのみち私に拒否権は無いからな」

「ふふつ。良い心がけだ」

私はその言葉を待ってた様に、彼の前でゆっくりとガウンを脱いだ。乳首とラビアには以前彼が命令した時からのピアスを付けており、下着の替わりに縄で全身を縛っておいた。その光景に彼は一瞬驚いたようだったが、心の奥に眠るサディストの血が疼き目が輝いた事を私は見逃さなかった。私はその『目』を待っていたし期待していたのだ。そして興奮の余り喉の乾きを覚えつつも、私はこう言い放った。

「昔のように、私を自由に使ってお前の心の底に眠っている闘争心を取り戻して欲しい。お前はそれがとっても素敵に見えるから・・・」

シヤアは少々躊躇していたが、やがて冷酷な目つきになり、私にこう言い放った。

「・・・じゃあまず奴隷としての忠誠を示して欲しいものだ。ハマーン」

彼の目の前に佇む私はもうアクシズの指導者ではなかった。顔が火照りトロンとした目つきをした彼

の奴隷に過ぎなかった。それが彼だけが知っている本当の私の姿なのだ。

「・・・判りました。・・・御主人様・・・このハマーンの体・・・どうか好きにお使い下さいませ」

私は彼の前に正座し、机の上に事前に用意していた箱をそっと差し出した。彼はその箱を開けた瞬間、ニヤリと笑ってこう言い放った。

「ほう。これらは一体何なんだ？言ってみろ。ハマーン」

「そ・・・それは・・・」

「何だ？言えないのか？」

「私を・・・責めて頂く為の道具です。この中からお好きな物を使って私めを調教して下さいませ。どうかお願いします」

箱の中には、大小のバイブから首輪、鞭、蠟燭、浣腸器具一式等、以前私と彼が愛用した道具が山ほど入っていた。彼はそれを懐かしそうに手に取り、様々な思い出話をするのだったが、私は余りの恥ずかしさで顔を伏せようとした。すると、彼はそんな私の顎を手で引き上げた。

「主人が命令する事以外の事はするな。判ったか？ハマーン」

「はい・・・申し訳ありませんでした。ご主人様」

「しかし・・・何とも恥ずかしい格好だな・・・ハマーン・・・。これがアクシズの指導者の姿なのか？」

シヤアは私を鏡がある方へ向かせた。鏡の向こう側では、いやらしい姿と表情をした私が、恥ずかしそうにうごめいていた。その瞬間、私は体に電気が流れるような感覚を受けた。

「嫌っ！・・・」

恥ずかしさのあまり目をつぶる私に、彼は軽く平手打ちをした。

「目をつむるな。自分の姿を見つめろ。ハマーン」

「う・・・どうかお許し下さい。恥ずかしくて私・・・」

「何がお許し下さいだ？お前は私にこんな姿を見て欲しかったんだろう？」

シヤアはそう言いながら、右乳首に付けられているリング状のピアスを指で弾いた。

「うんっ！！」

痛くもあり、気持ち良くもある複雑な感覚が私を駆け抜けた。

「どうだ？気持ちいいんだろう？」

「は・・・はい・・・とっても・・・」

「だろうな。で、なければ、ここがこれ程濡れてはこないだろうからな・・・」

彼が、股縄で閉じられている、ラビアを強引にこじ開けながら、私のヌメリきっているアソコへ中指と人差し指を突き入れた。中でこねくり回された私は、その時声にならない声を発していた。やがて、愛液がたっぷり付着した指を私の前に差し出し、さも知らなさそうな口調で言った。

「お前の中から出てきた液だ。なんでこんなモノが出てくるんだ？」

「・・・」

「どうした？なぜ黙っている？」

「・・・恥ずかしくて・・・言えません」

「何故だ？何故言えない？お前は自分で縄掛けする位の変態なんだから、どうしてこんな液が出てくるか位判るだろう？もし言えないんだったら、今すぐこの姿のまま部屋の外に連れて行くが・・・」

その瞬間、私はアソコがキュッと締まるような感じがし、全身をゾクッとする快感が貫いた。こんな姿が船内にいる皆にバレたら、私は今まで築き上げた地位や名誉を一瞬にして失う事であろう。だが、それと同時に全身が張り裂けそうな快感に見まわれるかも知れないと思った。誰かに見られたい・・・見て欲しい・・・と言う私の淫らな想いが頭の中を駆け巡るのだった。

「そうか、判った」

彼は、身動きが取れない私を抱き上げた。

「やつ、やめて！・・・やつ！！いやっ！！いやーっ！！」

暴れる私を半ば強引に抱きしめ、歩き続ける彼。自動ドアが近付いて来るにつれて、私の心臓の鼓動は激しくなり爆発しそうな位になった。声では拒んでいるのであるが、心の中では、皆に嘲笑され変態と罵られるのを望んでいるもう一人の自分がいたのも・・・事実だった。部屋のドアを開け、気圧調整ブロックに移動し、通路とドア一枚隔てた所まで来た時、私は怖さと恥ずかしさで目を開けることが出来なかった。

「いいな・・・出るぞ・・・」

「は・・・はいっ・・・」

心臓の鼓動が最高潮に達した私は、小さく頷いていたのだった。頭の中には『見られる』という言葉と『変態』という言葉が交互に連呼しながら・・・。軽いオルガスムスを迎えようとした瞬間、正に絶

妙のタイミングで彼はクルリと元の場所へ引き返した。不思議に思っている私に向かって彼はこう言い放った。

「奴隷が喜ぶ事をやっても、調教にはならない・・・か。皆へのお披露目は、とりあえず中止だな」
屈辱感にまみれた私は、恥ずかしさの余り涙を流しながらこう言い放った。

「・・・サデイスト・・・」

「ふんっ・・・光荣だ。お前はこういう私になって欲しかったのだろうか？」

「え？・・・は・・・はい」

私のプライドを粉々にき、奴隷の立場を自覚させるには充分過ぎる行為だった。それ自体はとても屈辱的な事ではあるが、シヤアという存在は私のストレス発散と心の安定の為には無くてはならない存在なのである。彼以降そんな人間が私の前に現れる事は無かった。

そして・・・本格的な調教が始まった。

床に仰向けに寝かされた私は、まず私の手を後に回して皮の手枷を付け、奴隷の証の首輪を装着させられた。次にM字に縛られて閉じることが出来ない状態にさせられた。そんな股間を彼に食い入るように見つめられ、耳元で屈辱の言葉の数々を浴びせられた。私は余りの恥ずかしさに体をよじって抵抗したが、余計に縄が体に食い込んできて自分を苦しめる結果となった。そんな状態でいると、もう痛いのか気持ちいいのか判別が付かなくなってくるのが感じられた。縄酔い・・・そんな言葉がぴつたりと当てはまる状態だった。

やがてシヤアは私の股間に通っている二本の縄を左右にこじ開けて、道具箱の中から大きなリモコンバイブを取りだして私の目の前に付き出した。

「これは何だ？ハマーン？」

「バ・・・バイブレーターです」

「どこに使うのかは判ってるな？」

「はい。私の恥ずかしい穴です。どうか自由にお使い下さい。ご主人様」

「よく言えた。ではご褒美だ」

彼は私の唇に褒美のキスを軽くした後、股間の縄を両手の指で開き、バイブをグイッと入れた。

「うっ！」

バイブはかなり太かったが、今までの調教で濡れていた私の股間は、驚くほど呆気なくそれを飲み込んだ。

「ほう。入らないかと思ったが、こんなに簡単に入るとはな・・・」

彼はそう言いながら、小さな卵形のバイブをクリトリスに当て、縄を元の状態に戻してそれらが簡単には抜けないようにした。

「さて・・・では、始めるとしようか」

「はい。お願いします・・・」

「では・・・」

手元にある両方のバイブのスイッチを弱に入れる。その途端、私の体に装着されているバイブが振動を始めた。

「ああ・・・ああっ・・・」

弱い快感の波が私の中を駆けめぐった。絶頂には程遠いが、快感は継続して続くという微妙な状態に、私は体をくねらせながら必死に耐えていた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

快感の波は絶えず襲って来るのに絶頂感を迎えられないもどかしい状態がしばらく続いた時、私は思わずこんな言葉を発してしまった。

「ご主人様。お願いします。イかせて下さい。このままでは私・・・気持ち良くて壊れてしまいます！」

快楽で火照って赤くなり、涙目になっている私の顔を彼はそつと撫でてくれた。

「いい顔をしてるな。ハマーン」

「ありがとうございます」

「私がいいと言うまで耐えられないのか？お前はそんなに心が弱い奴隷なのか？」

「も・・・申し訳ありません。どうかお許し下さいませ。ご主人様」

「ふふっ、よい心がけだな。ハマーン。さあ、口を開けて舌を出すんだ」

「はい」

私が言われるままにすると。彼は私の顔よりも高い位置から、唾液を私の口に垂らした。

「ご褒美だ。美味しいか？」

「はい。ありがとうございます」

「愛してるよ。ハマーン」

「私も・・・いつまでもお慕い申し上げます」

例え彼のその言葉が嘘だと判っていても、私は彼がそう言ってくれた事が何よりも嬉しかった。彼はその後ソファに戻り、グラスに酒を注ぎながら快楽で身をよじる私を嬉しそうに眺めていた。小さな波が押し寄せては消える状態を何度迎えた頃だろうか。口からよだれを垂らしながら床に転がっていた私を彼は優しく起こした。そして、半開きの口に自分の口を重ねた。その瞬間私は軽い絶頂を迎えてしまった。

「イッてしまったのか？」

「はい・・・。申し訳ありません・・・」

「まあいい」

シヤアは優しく私を抱き締めた。彼の温もりが私に伝わってくる。股間の2つのバイブは依然稼働し

ているが、快樂の高まりでもう夢か現実か判別が出来ない状態になりつつあった。もし仮にこの瞬間彼に殺されたとしたら、私は最高の快樂と共に最後を迎える事が出来るであろう。やがて彼は縛られたままの私の体を、膝を軸にしてうつぶせになるような姿にした。身動き取れない体を、開き気味にした両膝と片方の肩と顔で体を支えているという感じだ。お尻を高く付きだしたその姿は屈辱的な姿ではあるが、同時に全てをさらけ出して快樂の底に落ちている自分をとて愛しく思えた。

「ハマーンは下の毛をいつも剃ってるのか？確かこの前も綺麗に剃ってあったが・・・」
優しい口調でシヤアが言った。

「はい。ご主人様と誓った事ですから・・・」
「良い心がけだな」

「ありがとうございます。ご主人様にお褒めの言葉を頂きまして、ハマーンはとても嬉しいです」
アクシズ時代に私とシヤアの間で交わされた奴隷誓約書の中に『下半身の毛は毎日剃って常に綺麗に保つ事』と言う文があった。私はそれを忠実に守っているうちに、剃毛がごく当たり前の行動になっただけなのだが・・・。

「お前の大事な部分はおろか、アヌスの回りも綺麗に剃られているな」

「奴隷の嗜みとして、剃り残しが無い様に心がけています」

「ふふ・・・指導者として振る舞っているお前のお前がこんな状態だとは、誰も知らない事だな」

「はい。この様な事を知っているのは、ご主人様だけでございます」

「この変態が・・・」

その言葉に、私の心はビクツと反応した。普段気丈に振る舞っている私が、快楽を追求する変態だと知れ渡ったら・・・そう思うと私は軽い陶酔感を覚えた。

私が弱で稼働し続けているバイブの快楽に身を委ねていると、彼がテーブルの上に置いてあったカメラを手を取った。そして私の身動きがとれない姿をあらゆる角度から撮り始めた。カメラのシャッター音が鳴る度に、私の淫らな心がどんどんと大きくなっていった。

「はぁ・・・あぁっ・・・はぁ・・・」

余りの快感に、私は冷静な呼吸が出来ない状態だった。

「良い表情だ。ハマーン」

カメラが私の熱く火照り、トロンとした表情になっている顔を撮っていた。快感で意識がもうろうとしているので、彼を見ている焦点が上手く定まらなかった。そんな状態でいた時と、彼がこう言い放った。

「ふむ。もう少し躍動感が欲しいモノだな・・・」

彼の言ってる意味をもうろうとした頭で考えていた時、急にバイブの振動が強くなった。

「あっ！あああっ！がっ！」

快楽の波が更に高まってくる。そいしていると彼が私の胸元に手を伸ばした。その瞬間、乳首に軽く痛みが走った。

「あんっ！」

バネを弱くしたクリップを両乳首に付けられたのだった。それによって私の快楽の波は更に高くなり、

前身が性感体のようなになった錯覚さえ覚えた。

「あっ・・・ああっ・・・」

快楽を必死に堪えて抵抗する私に、彼は優しくこう言い放った。

「じゃ、お前がイク瞬間の画像を残そう。イッていいぞ」

「はい。ありがとうございます・・・あああっ！！！」

全身から込み上げてくる快楽は、体に必要以上の力みを生ませた。それは体中に巻かれた縄によって封じ込められるのだが、その時にきつく食い込む縄の感触が更に快感を増幅させた。

感覚的に、絶頂を迎えるレールの上に乗ったような感じになった私は、口から唾液を垂らしながら、いやらしい表情をしつつも必死に快楽に耐えていた。やがて快楽が頂点を迎えようとした時、全身が硬直するような感じになった。

「い・・・イクッ！！！」

体中が痙攣し、頭が真っ白になっていく。全身を縛る縄が容赦無く私に食い込んでくるのだが、それがとても気持ち良く感じた。

「あああっ！！！！！」

数秒位の絶頂感を迎えた後、私は腰を浮かした状態から、ゆっくりと前に滑るような感じで床に伏せてしまった。体が弛緩して力が入らなくなったのだ。シャアはそんな私の姿を無言のままカメラに撮っていたが、やがてバイブのスイッチを止めて私の側に来た。

「気分はどうだ？ハマーン？」

「はい。最高・・・です」

息を切らしながらそう言った私を、彼は後ろ手に縛った腕の縄を解き、優しく抱き締めてくれた。全身と膝から下の部分が拘束されてるとは言え、彼に抱かれている時はとても心が安らぐ。連日の戦争のお陰で荒んでしまった心を癒すには、最高のパートナーだった。

「まだ大丈夫か？それとも止めるか？ハマーン？」

彼の言葉に、私はわざと奴隷の言葉を使わないでこう応えた。

「そんな決定権がお前にあるのか？シヤア」

その言葉に一瞬戸惑ったシヤアだが、私の意図を組み取ると、半分笑いながらこう言うのだった。

「口の聞き方に気を付けてもらおう。ハマーン」

どちらからともなく唇を重ねた。私は彼に抱き付き、本能の赴くままに彼の口の中へ舌を這わせ、絡めていた。彼の手が胸へ、股間へと這ってくる度に、私は荒い息遣いを覚え快楽に身を任せるのだった。私が何度目かの軽い絶頂を迎えた時、彼は私を抱きかかえるのを止めて床に四つん這いになるように命じた。

「これを見たら、これからお前に何をするかは・・・判るな？」

彼がガラス製の浣腸器を持ちながら、再び見下すような目つきで言い放った。

「はい。判ります」

「何をするのだ？言ってみろ」

「か・・・浣腸・・・です」

「では何故そんな事をするのだ？便秘でも無いのにこんなモノを欲しがるなんて、お前は変態じゃないのか？」

「は・・・はい。ご主人様のおっしゃる通り、私・・・ハーマンは自分の快樂の為だけに浣腸液を欲しがる変態です。ご主人様の手で嫌らしい奴隷である私に浣腸を施して下さいませ。どうかお願いします」
私はそう言うと、彼の前に手を付いた。浣腸はそれをした後に訪れる永遠に続くように思える苦痛はこの世の全ての事を束の間の間だけでも忘れる事が出来るのだ。また限界を超えて全てを排出し終えた時に訪れる安らぎは何物にも代え難い幸せな気分をもたらしてくれるのだ。それがあからこそ私はこの行為を止められずにいた。彼は無言のまま何やら作業をしたかと思うと私の背後に回り、こう言った。

「お前は普段どの位入れているのだ？」

「はい。普段はグリセリン五十パーセント液を五百ccです」

ストレートな言葉に、顔を真っ赤にして答える私だった。

「ほう、そんなに入れるのか」

「はい」

「以前私とプレーを行っていた時は百cc位だったが・・・」

「ご主人様が去ってから、私は自分で自分を慰める際に、少しずつ量を増やしてまいりました」

「ふむ。最高でどの位入れたんだ？」

「はい。ストレスが酷くて自分を滅茶苦茶に虐めたいと思った時に二千cc程・・・」

「そんなに入れたのか・・・！その時はどうだった？」

「お腹の中が圧迫されてとても苦しかったです。姿も妊婦のようになりました」

「どの位我慢したのだ？」

「五分でした。その時はシャワー室で行ったのですが、激しく絶頂を迎えて栓を飛ばして汚物まみれになったまま三時間も気絶しておりました」

「そうか。だが余り無茶なことはするな。お前の体はお前だけのモノじゃない。お前を支持してくれる民衆のモノでもある。それを忘れないようにしろ」

「はい。勿体ないお言葉、ありがとうございます」

「では、素直に答えた事に対してご褒美をあげるとしよう。足を少し開いてお尻を高く突き上げるんだ。ハマーン」

「はいっ。ご主人様」

私は言われた事を実行して、ひたすら待った。そうしていると、彼は私の股間を縛っている2本の縄を左右に開き、ワセリンをアヌスに塗ると浣腸器を差し込み、中に入っている浣腸液をゆっくりと私の体内に注入していった。

「ああっ・・・」

思わず声が漏れてしまう。普段排泄するために存在する部分に、浣腸液が逆流という形で進入してくる。それ自体は別に大した事では無いのだが、その行為自体に私は興奮していた。

『入ってくる。私を狂わす液体が入ってくる。もう全てを出してしまうまでは苦痛から逃れられない・・・ああっ・・・』

私が心の中でそう思っていると、彼が私のお尻を軽く叩きながら言った。

「今日は長く我慢して貰うので二百ccで止めておこう。いいか？」

「はい。判りました」

「まだ腹は痛くないか？」

「はい。まだ大丈夫です。でも、そろそろ・・・」

その言葉を聞いた瞬間、彼は残りの浣腸液を一気に注入し、その後シリコン製のストッパーを差込み、縄を元の位置に戻した。これで余程の事が無い限り排泄物を撒き散らす事は無いのだが、それは自分の意志では排泄できないという事でもあった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

四つん這いの格好のまま浣腸液で張った腹を気にしつつ、私はひたすらその時を待った。

『来る・・・来る・・・あ・・・あっ・・・来たっ！』

下腹部に鈍い痛みが走ったと思った瞬間、浣腸液が腸内を暴れ回るような感じを受けた。

「あぁっ！いたっ！い・・・痛い・・・」

お腹を押さえながら必死に痛みを堪えた。

「最低二十分は我慢するんだな」

「はい。ご主人様・・・あぁっ」

痛さの余り体を丸くしてしまう。私は少しでも痛みを和らげようと、体をよじり、乳首に通されているピアスを引っ張ったりした。しかし私の賢明な努力も虚しく痛みは少しずつ増していった。

「ご主人様！お願いします！バイブのスイッチを・・・スイッチを入れて・・・ううつ・・・下さい」
苦しみにのたうち回りながら、私は必死にお願いした。バイブによる快楽が、苦痛をホンの少しだけ和らげてくれるからだ。もし、その時苦痛を和らげてやる代わりに通路へ出てみると言われたとしたら、私は躊躇わずにそれを実行してしまう事だろう。しかし、苦痛を和らげるところか、彼からの言葉は残酷なものだった。

「お前が充分頑張ったと思えた時にスイッチを入れてあげるよ」

「そ・・・そんな・・・」

「返事はどうした？」

「はい。その時が来ましたらお願いします」

そして私は再び地獄の苦痛の中に戻っていった。

「ああ・・・漏れる・・・出ちゃう・・・」

我慢をして五分位経った頃だろうか。アヌスがヒクヒクと蠢き、体が排泄物を出したがってのだが、栓があるお陰で体の中で激しく暴れ回っている・・・そんな状態を迎えていた。

「ああっ・・・出ない・・・出せないよう・・・」

苦痛に満ちた表情で片方の手でお腹をさすりながら、もう片方の手でピアスを引っ張り、必死に耐えていた私だったが、痛みは容赦なく私を襲った。

「あっ！・・・がっ！・・・あ・・・」

もう思考回路が滅茶苦茶になり、考える事は一刻も早く排泄したい、楽になりたいという事ばかりだっ

た。どの位経った時だろうか。もうピアスを引っ張る思考も薄れ、四つん這いになって我慢の限界をひたすら迎える様になっていたその時、股間の二つのバイブが強烈に動き始めた。

「あがぁ！・・・が・・・あ・・・」

体がびくんと跳ね、体が自分の意志とは関係なく勝手に動き出すような感じになった。

「あ・・・！あっ・・・！！！！」

苦痛と快楽が重なり、快楽の波が数倍になったような感じで押し寄せてきた。私は膝立ちのまま上を見上げるような格好になりながら見ているようで見ていない天井を向いていた。アヌスが弛緩して開いていくのが判った。もちろん排泄物はストッパーと縄で出る事は無かったが、その際に訪れた快楽の波は、先程迎えた絶頂感などよりも数倍大きなものだった。

「あ・・・がっ・・・い・・・イクッ！」

頭が真っ白になり、体の中心部にぽっかりと穴が空くような感じを覚えつつ昇天し、糸が切れた操り人形のようにその場へ倒れてしまった。半分意識が無いような私を彼はシャワー室まで抱きかかえながら連れて行き、縄を外して栓と股間のバイブだけの姿にして膝の上に座らせた。

「大丈夫か？ハーマン」

「はい・・・大丈夫です。余りの気持ち良さにボーっとしてしまいました」

「そんなに気持ちよかったのか？」

「はい。とっても・・・」

普通なら縄掛けを解いた状態でいれば栓を飛ばして排泄してても良さそうなものだった。だが、排泄

してなかったのは絶頂を迎えて一瞬だけ痛みが引いている事もあるが、彼が自分の膝上に私を座らせ、太ももで栓を止めていた上に、更にそれを彼が手で押さえていたからだった。

「そうか、では最後の行為だ。私に排泄する所を見せておくれ」

「はい・・・でも恥ずかしいです。ご主人様」

私の言葉に、彼は今までとは違う表情を見せながら、優しくキスをしてくれた。

「もう主人と奴隷の関係で話さなくてもいいよ」

「でも・・・」

「どんなに恥ずかしいと耐えてみた所で、出るものは出るからな・・・演技をする必要はもう無いよ」

「演技だなんて・・・私は貴方の前では私はいつでも従順な奴隷です」

「じゃあ、何故あの時私に銃を向けたのだ？」

「シヤアは劇場でのシロッコやカミーユといった時の事を言っているらしい。

「それは・・・大切な貴方に銃を向ける事で私中に背徳の心が芽生えるんですもの・・・」

「私に対する辛い態度を取るのもそうなのか？」

「はい。Sとしてではなく、Mとして感じています」

私がそう答えると、シヤアは私を強く抱き締めてくれた。この感じ・・・彼以外の男では味わえる事が出来なかった本当の心地良さ・・・しかし、それも下腹部の痛みによつて長くは続かなかった。私は痛みを堪えながら彼に最後のお願いをした。

「シヤア、またお腹が痛くなってきましたので、そろそろ出してしまいそうです。でもその前に私の最

後のお願いを聞いてくれますか？」

「なんだ？」

「私をもっと・・・もっと汚して下さい！」

「汚す？」

「はい！屈辱的で惨めで普段の私からは想像も出来ない位の姿に・・・お願いします」

「・・・判った」

彼はそう言いながら私のバイブのスイッチを入れた。私の体の中にある淫らな血が再び騒ぎだした。快楽と苦痛とに耐えつつ、私はアヌスの栓を片手で必死に押さえながら、彼の元からシャワー室の床に移動した。彼の太モモには栓の隙間から漏れた茶色い排泄液が付着していた。

「シャア・・・太モモに・・・」

彼の方に向き直して膝立ちをしながら、片方の手でクリトリスをいじり、片方の手で栓を必死に押さええている私の姿がシャワー室にある鏡に映し出されていた。とても惨めで屈辱的な光景なのだが、今はそこまで堕ちて全てをさらけ出しながら頬を赤らめている自分が、興奮している事もある。とても美しく見えた。

「ああ・・・この事か・・・よく見ると手にも付いてるな。まあいい」

彼が私の排泄物を右手で触った。

「あつ・・・ダメッ・・・」

「お前の体から出たものだ。汚くなんかないよ・・・」

シヤアは指先に付いた汚物を少し舌で舐めた。普通の人なら嫌悪する行為ではあるが、仮に演技であるとは言え私の為にそうしてくれる事自体がとても嬉しかった。

「さっ、自分の物だ・・・舌を出しなさい」

「はい・・・」

汚物が付着した指先を、何の躊躇もなく舐める私がいた。いくら液体とはいえ自分の排泄物を舐める最低な女にまでに堕ちてしまったと思った瞬間、自分の心の中にある背徳な気持ちが増幅し、股間をまさぐる指使いが更に激しくなった。

「あっ・・・いいっ・・・」

激しく乱れる私を見ていた彼だったが、目の前に立ったまま、愛しい目で私の行為を見つめていた。私の前に大きくなった彼のモノが見える・・・そう思った瞬間、私はそれを口に頬張ろうとした。すると、彼は私の頭を押さえてこう言うのだった。

「そう慌てるな。口の中を洗ってからでも遅くはないだろう？」

「あ・・・申し訳ありません。つい・・・」

「気持ちは判らんでも無いがな・・・。じゃ、口を開けるんだ、ハマーン」

私がうつろな目で股間を触りながら待っていると、シヤアはオシッコをし始めた。最初はチョロチョロと真下に落ちる感じだったが、段々と勢いを増していき、私の太股、腹、胸を巡に濡らしていった。そしてやがて顎の所まで来た時、私は躊躇無く口を開いた。

「あ・・・」

私はオシッコを口に含み、軽くうがいしながら飲み込んだ。少し塩辛かったが興奮していいのでそんな事は全く気にならなかった。そうしている間も彼は私に容赦なくオシッコを浴びせ続けた。私はクリトリスを愛撫するのを止めて、体中にかけられているオシッコを全身に塗りたいながら、まだ出ている残りを再び口の中へ招き入れた。他人には絶対に見せられない行為・・・だが、それらは愛する者と共有するという行為だからこそ意味があるのだ。

「シャア・・・好き・・・」

私はそう言いながら彼のペニスを口に含んだ。尿道に残ったオシッコを吸い出し、カリ首や裏スジを丹念に舐めた。彼のペニスが段々大きくなってくるのが判った。この行為自体は浣腸の苦痛を和らげる訳では無かったが、何かしてるという行為が一瞬であれ苦痛を忘れるのだった。だが、彼が射精するまで私の体は持ちそうに無かった。

「シャア・・・もう・・・出ます。ああっ・・・お願い・・・バイブを強にして・・・!!」

彼のペニスを離し、再び股間を激しくまさぐった。お腹の痛みはもう我慢出来ない位の状態であり、それに伴って快樂も相乗効果で増していった。今の私は一つの性感体のようなものだったが絶頂感に至るまでまもう少し足りなかった。もちろん私が必死に押さええる栓を抜けばこの苦痛から簡単に抜け出せるのだが、それをあえて行わず、理不尽な苦しみを必死に耐えるという行為自体に、Mの私は激しく陶醉していた。やがて、股間に刺さっているバイブの振動が大きくなった。

「グガッ!・・・」

声にならない声を上げてのけぞってしまった。苦痛と快感はいよいよ高くなり、あと少しで絶頂感を

迎える所までに達した。その時、私の行為を見ながら自分のペニスをしごいていた彼が言い放った。

「ハマーン・・・出るぞ」

「はいっ・・・」

私がそう言い終わってしばらくした時、自分のペニスをしごいていた彼の体が一瞬硬直したかと思うと、先から大量の白濁液が私の胸元から顔にかけて発射された。

『ああ・・・』

私は口の中に入った生暖かい精液を舌で味わい、飲み込んだその瞬間、快楽の波が頂点に達するのを感じた。

「あっ・・・イク・・・!!!!」

私はアヌスに突き刺さっていた栓を一気に抜き、大量の浣腸液と便を撒き散らしながら快楽の頂点に上り詰めた。そして私は視界が真っ白になりその場に崩れ落ちた。

*

*

どの位経った頃だろうか。私は絶頂感を迎えた後、気絶してしまったらしく、気付くとシャワー室の床が目に入った。そのままの体勢で辺りを見回したが、私の排泄物が無い事から、私が気絶している間に彼が片付けてくれたらしい。

「シャア？どこ？」

私は起きあがって立とうとしたが、腰と膝がガクガクになって再び床に這いつくばってしまった。また浣腸の為にアヌスに力が入らず、踏ん張れないばかりか緩くなったその部分から排泄物が時々私の意思とは関係無く漏れる始末だった。

「あ・・・立てない・・・」

私がそう呟くと、すぐ隣りにあるバスタブの中から彼の声が聞こえてきた。

「目が覚めたか？ハマーン」

「シヤア・・・」

私からは見る事が出来ないが、彼はバスタブにお湯を張ってそこにいるらしい。

「起きられないのか？」

「はい。腰と足に力が入りません」

「無理もない。あんな事をしたのだから・・・しかし・・・私もアクシズを去った後に、何人もの女性と同様の事をしてきたが、お前程淫乱で変態なヤツはいなかったよ」

「は・・・恥ずかしいです」

あんな事をした後だというのに、彼の言葉に顔を赤らめて恥ずかしがる自分がいた。快樂の波が引き淫乱な血が心の奥底に引っ込んでも、私の彼への想いは全く変わる事が無かった。それ程私は彼を愛していた。

「ふふっ・・・可愛いな。ハマーン」

彼はそう言うと、更に話を続けた。

「だが・・・今回の事は私の為と言うよりは、お前の為にやった感じだな・・・」

「ご・・・ご免なさい。シャア・・・私・・・日頃のプレッシャーに押し潰されそうで・・・つい貴方を利用してしまった・・・」

「なあと、謝る事は無い。お陰で私も自分の心を取り戻せし、人を屈服させて支配するという楽しみを思い出したからな。もつとも、それだけで割り切れないのが私だけが・・・」

「どういう事？」

「悪に徹しきれないという事だよ。お前もそんな私に苛立っていたのだろう？」

彼は自分の事を誰よりも判っていたのだ。それを知った途端、私は今までの彼に対してのわだかまりが、氷を溶かすかのように消えていった。

「そうだけど・・・それでもいいのよ。それが判っていれば・・・」

「お互い、ろくな死に方は出来そうもないな・・・」

「それは覚悟してるわ。私達はまともな死に方が出来ない立場にいるし、目的を忘れた上で天寿を全うしたりすれば私達を信じて死んでいった者達が浮かばれないもの・・・」

「・・・」

「私達は例え間違った道を進んでも、苦しみで自ら命を絶ちたいと思う事があっても、私達に課せられた使命がある内は、その日が来るまで戦い続けるしかないわ。だって、お互いそんな星の下に生まれてしまったんですもの・・・」

「そう・・・だな・・・」

歯切れが悪かったが、その言葉自体の意味を、彼は誰よりも良く判っている筈だ。いや、よく判っているからこそ素直には認めたく無かったのだろう。私は彼にこんな事を質問した。

「シャアは・・・これからどうするつもりなの？」

「どうするって・・・私はお前のペットなんだろう？この部屋で楽しく過ごすさ」

「ばかっ。本能に目覚めた野獣を部屋に置いてなんか置けないわ。こんな事を毎日やられたら私の体が持ちません！」

「ふふっ・・・でも好きなんだろう？」

「・・・はい」

彼の顔は見えないが、きっと笑っている事だろう。アクシズの民を率いる事を止めて、彼と毎日狂ってしまいうちに快楽をむさぼる事が出来たら・・・私はどれ程幸せだろう。

「そうか・・・私はお前のペットにもなれなかったか・・・。では私はしばらく裏に潜んで基盤の建て直しをするよ。私がエウーゴと組んだのは失敗だった。やっぱり連邦はどこまでいっても連邦だった」

「ここには・・・残ってくれないのね・・・」

「すまん・・・」

シャアの言葉に、私は少なからずショックを受けたが、一旦離れてしまったシャアとの道はもう戻る事はないのだとも思った。そして、私はこう言った。

「ううん。もういいの・・・またこうやって貴方と愛し合えたんですもの。それだけで充分よ。それに私がここへ引き留めても、それは私が憧れた『赤い彗星』じゃないわ。だから・・・もう・・・いい。」

今まで・・・ありがとう・・・シヤア・・・」

自分で自分にけじめを付けた後、私は更に話を続けた。

「私は・・・これからサイド1で物資を補給した後、連邦政府の拠点ダカールを占拠するわ。そして次にサイド3を奪還して私達の力を地球圏の人々に見せ付ける。そして・・・」

私がそこまで言った時、彼が口を挟んだ。

「今はまだ良いとして、連邦軍が戦力を立て直し始めたら、アクシズなんぞは簡単に負けてしまうぞ。ティターンズが壊滅した今、エウーゴは連邦軍に帰属するだろうし、一つになった連邦軍にアクシズが勝てる要素は万に一つも無い。デラーズフリートの二の舞になるつもりか？」

彼の言葉に私はこう答えた。

「確かに・・・そうなる可能性はとっても高いわ。でも・・・シヤア・・・貴方がエウーゴで失った支持基盤を立て直すまでの時間稼ぎにはなるでしょ？」

「私の為に捨て石になるつもりなのか!？」

「うーん・・・。それは後の人達が決める事だわ。私は今、私のやるべき事をするだけ・・・それだよ・・・シヤア」

「判った・・・もう何も言うまい。・・・だが・・・出来る事なら生き延びてくれ・・・頼む・・・」

「は・・・はい。とっても嬉しい・・・です」

それはどんな励ましの言葉よりも嬉しかった。苦しく、辛い日々の繰り返しの中で、快樂以外の事で癒されたのは彼とアクシズで過ごして以来の事だ。

そのまま沈黙した時が流れた。私はその間力が入らない体を必死になって動かし、バスタブの縁に掴まって彼の顔が見える所まで移動した。私が愛し、憧れる彼・・・この先例え進む道が違ったとしても、二人で共有したこの時間はこれから先も決して忘れる事が無いだろう。

「シヤア？」

「なんだ？」

「ここを今日明日出ていくという訳では無いんでしょ？」

「まあ・・・そうだな・・・」

その言葉を聞いた瞬間、私の心の中に潜む淫らな心が再び込み上げてくるのが判る。

「じゃ、やっぱその間だけ私のペットとして飼う事にするわね。たっぷりミルク絞ってあげるから覚悟してね。シヤア」

「お前・・・先程は体が持たないもう充分と言っていたのに・・・もうこれか・・・」

「ふふっ、私は貴方に仕込まれたんですもの。貴方の調教の成果だと思って諦める事ね・・・」

「何も知らない純粋な娘だったとは思えない発言だな・・・」

「人は変わっていくものでしょ？シヤア・・・」

私はそう言って彼を幸せそうに見つめた。シヤアは少し照れくさそうに視線を逸らした。そうした他愛もない時間がしばらくの間過ぎていったが、私はふとある事を思い出してこう切り出した。

「そう言えば・・・今日はまだシヤアのペニスって頂いて無かったわ」

「お前・・・まだ満足してないのか？」

「ええ、他の誰でもないシャア・アズナブルとの行為ですもの。例えやり過ぎて心と体が壊れてしまったとしても、私は後悔はしないわ」

「しかし、アヌスが緩んで腹に力が入らないだろうか？それに垂れ流し状態ではないのか？」

私はその言葉に片方の手をアヌスに当ててみた。確かに言うとおりのゆるゆるになってるばかりか、太い栓をしていた為にぽっかりと口を開けているような状態になっていた。

「そう・・・みたいね」

「だろう・・・日はまだある。今度ゆつくり・・・」

シャアがそこまで言った時、私はその言葉を遮るようにこう言い放った。

「イヤ！私は時間が許す限りシャアとの行為を楽しみたいの！力が入らなきやまた栓をすればいいわ。私が果てて疲れて眠るまでやり続けるの！」

口を膨らませて拗ねる私を彼は呆れたような表情で見つめた。やがてバスタブから起きあがり、私の側に来て胸と下半身を触りながらこう言うのだった。

「じゃあ、今日はお前の後ろの穴に3回出してあげるよ。私も自信はないが、お前の為に努力しよう」

「は・・・はい！」

「なんだアヌスがユルユルではないか。これならフィストファックも出来そうだな。・・・またやつてみるか？」

「え？あ・・・はい。シャアが望むのでしたら・・・」

そう答えた私を、彼はそっと抱き締めてくれた。私はそんな彼の腕にそっと舌を這わせた。

「ふふ。でも、その前にそこを綺麗にしないとな」

彼はスツと立ち上がるとシャワーホースを手に取り、ヘッド部分を取り外して、ホースの先端を私のアヌスに差し込み、ゆつくりとコックを捻った。アヌスの中に生暖かい感触が広がっていく。

「あ・・・ああ・・・」

「お前の方から言い出した事だ。後悔しても遅いからな」

「はい・・・ありがとうございます。ハマーンは、シヤアに愛されてとっても幸せです」

こうして、私達の行為は延々と時が許す限り続けられた。

*

*

その後、私達の行為は延々一月程続けられた。私は任務をこなす傍ら、彼との肉欲に溺れる日々を過ごしていたのだが、表向きはシヤアは失踪したという事になっていた。その方が後々彼も動きやすいと思っただからだ。そして私達は通常のセックスはもちろんの事、今回ここに書いたプレイ以外にも、考えられるあらゆる事を実行して快樂に身を委ね続けた。ある日などは食事と睡眠以外は全てセックスという日々も有った程だ。

だが、そんな夢の日も当然ながら終わりが来た。彼との別れの時が来た時、私は彼にミネバ様を託した。アクシズ・・・ネオ・ジオンが遅かれ早かれ負ける事が判っていたからだ。シヤアとミネバ様が生

きていれば、ジオンの再興はいつでも出来る。要はタイミングの問題なのだ。

さて、これでサイド1での彼との話は終わりだ。これを読んだ方は信じられないと思うかも知れないが、グリプス戦以降、私とシャア・アズナブルとの間に有った事を嘘偽り無く書き記したつもりだ。彼とは良いパートナーにはなれなかったが、快樂にまみれたあの日々は、私の人生の中で間違いなく最高の日々であつたと断言出来る。そして未練がましい事だが、彼に対する私の愛はこれからも決して変わる事が無いだろう。

私はこれを書き上げた後、ジュドー・アースタが待つ宇宙へ出撃する。彼もまたシャアとは違った意味で時代を動かす男になる逸材だ。もう少し違った出会い方をしたのであれば、私のパートナーとして日に政治を、夜に快樂を共有したかったのだが・・・こればかりは運命と思って諦める事にするよ。

私はジュドーとの戦いに勝って帰ってくる。この文章が日の目を見ない為にも、私は必ず帰ってくる。そしてまた、もう一度彼の胸に抱かれて昇天したいと思っている。

私は本当に俗物な女だよ・・・。